

2 中学校 道徳学習指導案

- 1 主題名 「正義、公正、公平、差別や偏見のない社会の実現」 内容項目 4－(3)
- 2 資料名 「それでも僕は桃を買う」
(出典 第33回(平成25年度)全国中学生人権作文コンテスト内閣総理大臣賞)
- 3 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について

内容項目 4－(3)は、「正義を重んじ、だれに対しても公正、公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努める」ことをねらいとしている。

東日本大震災及びそれに伴う福島第一原子力発電所の事故による根拠のない思い込みや偏見による差別は人権侵害につながる。人はだれもが自由・平等であり、幸せを求めて生きる権利をもっており、差別や偏見のない明るい社会を実現するためには、正義を愛する心が不可欠で、他者の痛みを共感できる豊かな心情を持ち、自他の不正や不公平を断固として許さない姿勢が求められる。力を合わせて積極的に差別や偏見をなくそうとする態度を育成したいと考え本主題を設定した。

(2) 生徒の実態について

中学生になると、社会の在り方に目を向け始め、現実の社会がもつ矛盾や課題に気付く、理想を求める気持ちや正義感も強くなっていく。その一方で、自己中心的な考え方や行動をとりがちになる。仲間の前で正しい行動をとることを躊躇し、不正な行動や差別的言動が目前で起こった場合、内心ではいけないと思っても勇気を出して止めるなど正義の実現に努めることに消極的になってしまうことも多い。不正な言動を断固として否定するほどのたくましい人間が育つように指導することが大切である。この世の中から、あらゆる差別や偏見をなくすように努力し、公正、公平で明るい社会の実現に積極的に努めるよう指導したい。

(3) 資料について

本資料は、夏休みの家族旅行の往路で売られていた福島県産の桃に対する風評被害に、自身の国籍に対する差別を重ね合せたが中学生が、差別や偏見をもたないと決意する内容の作文である。サービスエリアで桃をねだる子供に放射性物質の汚染を心配する母親が「だって、福島産だよ。」と言った光景が、主人公に引っかかりを感じさせていた。その引っかかりが、仲の良かった友達から言われた言葉と「だって福島県産だよ。」という言葉が持ついやな響きと同じだったと感じた時、主人公自身も福島県産の桃に対して偏見を持っていたことに気付いた。

知らないうちに偏見を持ち、差別する側にいることに気付いた主人公の気持ちに共感させながらも、世界から差別や偏見をなくす鍵は2つあると考える主人公の体験と決意から、偏見や差別を許さない態度の育成につなげていきたい。

4 ねらい

正義を重んじ、だれに対しても公正、公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努める

態度を養う。

5 人権教育上のねらい（災害時における人権への配慮）

他者の痛みや感情を共感的に受容し、差別や偏見のない社会の実現に努めようとする態度を養う。

6 人権教育上の視点

- (1) 差別や偏見のメカニズムを知り、そのことによって起こる人権侵害について理解する。
(知識)
- (2) 差別や偏見から起こる被害者や差別される側の心の痛みを知り、人として差別や偏見を許さない社会を築こうとする態度を身に付ける。
(態度)
- (3) 差別される側の立場に立ち、相手の痛みや心情を想像する力、感受性や共感的な理解力を身に付ける。
(技能)

7 展開

(1) 事前指導

人権作文を書き、生活をふり返らせる。互いの人権作文を発表し合い、さまざまな人権問題があることを理解させる。

(2) 本時の展開

◎人権教育上の配慮

	学習活動・主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 ☆評価
導 入	1 「東日本大震災」の概要について確認する。 ・避難所で起こる人権問題について（子供・女性・高齢者障害のある人など） ・風評被害とは何か	・4年前の出来事をふり返る。 ・農作物等への風評被害がある。 ・原子力発電所の事故による差別や偏見が起きている。	・原子力発電所の事故により放出された放射性物質の被害と農産物に与える影響を説明し、理解を深める。また、放射性物質の検査について正確な知識を伝える。 ◎原子力発電所の事故に関する資料から風評被害は人権問題であることに気付かせる。
展 開	2 本時の資料について知る。 3 資料「それでも僕は桃を買う」の範読を聞く。 4 心に残った場面や話し合いたい部分を発表する。 5 話し合う。 ○サービスエリアで	・心に残った場面や話し合いたい部分に線を引きながら聞く。 ・心の中に「ひっかかり」	・登場人物、条件状況を整理し、話題をつかみやすくする。 ・生徒の表情を見ながら話題をつかめるように範読する。 ・生徒の意見を尊重しながら

展	<p>の親子の会話を聞いたときの僕はどんな気持ちだっただろうか。</p>	<p>を感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放射性物質の心配があるから危険だ。 ・放射性物質は、身体に良くない。親だったら心配するのは当然だろう。 ・そんなことを言うのはひどい。 ・検査をして安全だから売っているのに。 ・買う人の判断だから仕方がない。 ・わかっていても不安。 	<p>柱立てを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちや意見を大切にさせる。 <p>◎母親の発言を肯定的、否定的のどちらにとらたとしても、共感的な態度でその意見や考えを認める。</p>
開	<p>○友達に言われた「黙れ。中国人。」という言葉とサービスエリアで聞いた「だって福島産だよ。」という言葉が、同じ嫌な響きを感じたのはなぜだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・差別をしているように聞こえる。 ・自分の国籍や福島の人が育てた作物が侮辱されているようだ。 ・僕が言われたのと同じように、福島産の桃に対して偏見をもっているのを感じたから。 ・自分が何の理由や根拠もなく「国籍」によって差別されたのと同じように福島県産だからということで拒否されていることに対し、悲しみや怒りを感じたから。 ・「福島産」ということで買ってもらえないことを生産者の人が知ったら、僕と同じような悔しさを感じるだろうと思うから。 	<p>◎友達の言葉が主人公「僕」の心の痛みとなったことに気付き、共感的に感じとらせるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理由や根拠もなく「国籍」や「産地」が偏見や差別の対象になっていることに対し、同じ人間であること、安全なものであることが証明されている事実等を十分認識させる。
	<p>○僕が桃を買った時の「小さいけれど大きな僕の決意」とは、どんな決意</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分も嫌な思いをしたのに、福島産の桃だから買わないと言う人を仕方ないと思ってしまった。自 	<ul style="list-style-type: none"> ・桃を買わない行為は、差別される側の気持ちを知っている「僕」が福島の人々を差別していることになる

展	<p>だっただろうか。</p>	<p>分は福島産だからという偏見をもって桃を見ない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福島の桃への差別は、福島の人との差別と同じこと自分は差別をしない。 ・自分は国籍の偏見に負けない。福島の桃の生産者にも風評被害に負けずに頑張ってもらいたい。 	<p>気付き桃を買うことにした決意について注目させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・偏見に惑わされない主人公の強さに気付かせる。 ・公正、公平な態度をとっている主人公に気付かせる。
開	<p>○偏見や差別のない社会にするためにはどうあるべきだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他者を思いやる気持ちを持つ。 ・情報を正しく理解し判断していく。 ・よく知らないで外見やうわべだけで判断しない。 ・自分の立場に置き換えて考えるようにする。 ・互いを尊重し理解し合う。 	<p>◎差別や偏見は人間の心が生み出すことに気付き、差別や偏見のない社会がどうしたら実現するか考えさせる。</p> <p>☆正しい知識と理解、思いやりが差別や偏見をなくしていくことに気付くことができた。</p>
終末	<p>6 資料「それでも僕は桃を買う」をふり返り、これからのように生活していきたいかを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの情報から、適切な判断ができるような態度を身に付けたい。 ・様々なことに対し、差別や偏見を持たずに行動したい。 ・他の人のことをよく知る姿勢、他の人の気持ちを思いやる想像力を自分も大切にしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに自分の意見や考えをまとめることで、現在の自分の行動や考えを深く見つめさせる。 ☆差別や偏見を持たず、よりよい社会を築いていこうとする態度を身に付けている。

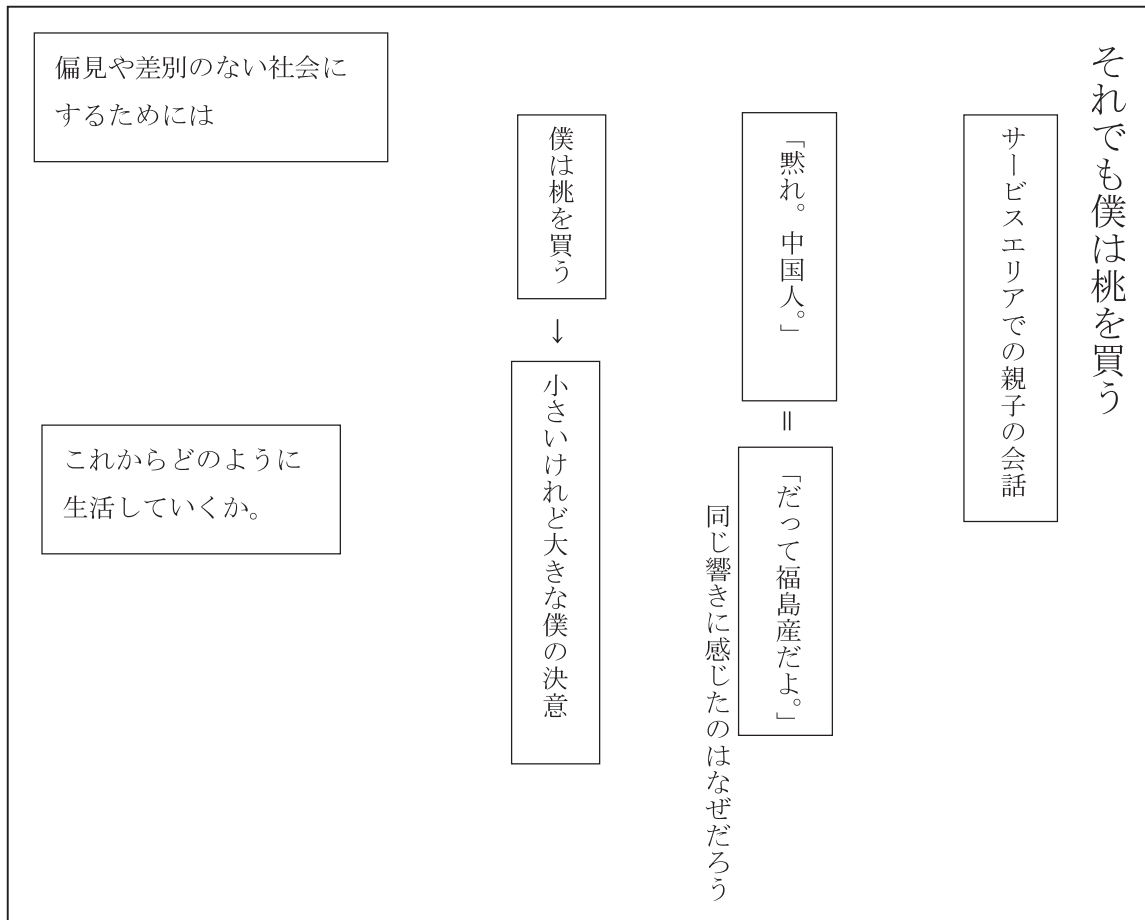
(3) 事後指導

- ・ワークシートに書かれた生徒の意見や考えを学級通信等に掲載し、人権尊重の意識を高める。

8 評価

- ・差別や偏見について自身の問題としてとらえられたか。
- ・正義を重んじ、だれに対しても公平、公正に接し、差別や偏見のない社会の実現に努める態度を育てることができたか。

板書計画



ワークシート

「それでも僕は桃を買う」

組 番 氏名 ()

- サービスエリアでの親子の会話を聞いたときの僕はどんな気持ちだっただろうか。
- 友達に言われた言葉とサービスエリアで聞いた「だって福島産だよ。」という言葉が同じ嫌な響きを感じたのはなぜだろうか。
- 私が桃を買った時の「小さいけれど大きな僕の決意」とは、どんな決意だっただろうか。
- 偏見や差別のない社会にするためにはどうあるべきだろうか。
- 資料「それでも僕は桃を買う」を振り返り、これからどのように生活していきたいかを書いてみよう。

ら遠ざけようとする。その気持ちだが、偏見や差別を生むのだ。

では、どうすれば、私達は警戒心をもたず、この世界から、偏見や差別をなくすことができるのだろうか。その鍵は、二つあると僕は考える。一つは、他の人のことをよく知ろうとする姿勢。もう一つは、他の人の気持ちを思いやる想像力。この二つが、未知のものへの警戒心を取り去ってくれる。

偏見や差別を、この世界からなくすことは本当に難しいかもしれない。けれども、二つの国の良さを知っている僕は、相手を知ろうとする姿勢と思いやる想像力を持ち、周囲の人に接していこうと思う。いつかきつと、お互いを慈しみ合う世界になることを信じて。

（出典 第三十三回（平成二十五年度）全国中学生
人権作文コンテスト内閣総理大臣賞

宮城県・古川黎明中学校 3年 大沼逸美）

この資料は縦書きなので

P16 の右上から読んでください

「黙れ。中国人。」

僕は中国生まれの日本育ちだ。日本に来てからずっと、自分が中国国籍であることを表に出して生活してきた。そのことに対して、友達の誰も触れることはなく、僕も中国国籍であることを気に留めることはなかった。

しかし、あの時、その友達の言葉は、鋭利な刃物となって僕の心に突き刺さった。そして、自分は他のみんなと違うんだと切なくなつた。仲の良かった友達が、心の中では僕を差別していたんだと感じ、悔しくてしかたがなかったのだ。幸い、友達とは仲直りすることができたが、しばらく、あの友達の放つた言葉は、僕の胸をひっかき続け、嫌な響きとなつて耳の奥に残っていた。

その嫌な響きと同じものを、「だって福島産だよ」という言葉に僕は感じたのだ。僕の場合は、中国という国のことを知りもしないのにばかにされ、福島は、放射性物質のことをあまり知らないのに、危ないと決めつけられ、自分と桃が重なって見えたのだ。風評被害という言葉は知っていたが、この時、

僕は、福島の桃は、被害ではなく、「差別されているのだ」とはつきりと感じた。

だから、僕は、桃を買うことにした。僕は差別される側の気持ちを知っている。それなのに、その僕が、知らず知らずのうちに、他の人と同じように福島県産の桃に偏見をもち、差別していた。それは、桃だけにとどまらず、福島の人々を差別していることにもなるのだと気づき、これではいけないと思つたからだ。

新潟からの帰り道、僕は、磐越自動車道のサービシアreaで、桃を買つた。それは、もう偏見をもたない、差別などしないという、小さいけれども大きな僕の決意でもあつた。

二十一世紀の今、日本そして世界中のあちこちで、いまだに多くの偏見や差別が残っている。生まれた地域や肌の色、病氣、そして、福島原子力発電所のように事故に関係するものなど様々だ。それらの偏見や差別の根本にあるのは、何なのだろう。僕は、警戒心ではないかと思う。よく分からないから、見えないから怖く疎ましく、自分か

それでも僕は桃を買う

夏休みのある日、僕は、家族といっしょに旅行することになり、一路、新潟を目ざして車に乗っていた。

朝早く家を出発し、東北自動車道から磐越自動車道に入り、サービスエリアで休憩をとった。サービスエリアの売店にはたくさんのお土産が売られていた。その中に、福島県特産の桃が並んでいた。その桃を見て、無邪気な子どもが母親に「桃食べたい。」とせがんでいた。しかし、その子どもの母親は「だめ。」と子どもに言い聞かせようとする。子どもも引かず「なんで。」と反論する。すると、母親は「だって、この桃、福島産だよ。放射性物質っていう良くない物がついてるかもしれないからね。」と説きふせたのだ。しぶしぶ諦めた子どもの姿を見ながら、僕は、心の中に何かひっかかりを感じていた。

車に戻り、走り始めた車の中で、僕は両親にさっきの出来事を話した。父は「やっぱり放射性物質がついていないとは言い切れないからな。」と言い、母

も「確かに心配ではあるね。」と言った。これまでの自分を振り返ってみると、僕も同じようなことをしていたことを思い出した。僕の住んでいる地域のスーパーマーケットでも、「福島産」と表記されていると、どうしても避けてしまうことがあった。しっかり検査を受けて市場にでていると分かっているけど、なんとなく不安だったからだ。サービスエリアの出来事にひっかかりを感じてはいたが、僕はそのことを忘れようと思った。

しかし、僕の頭から、「だって福島産だよ」という言葉が離れることはなかった。なぜ、そんなにも、その言葉が気になるのか、僕は、旅行中、ずっと考え続けていた。そして、思い当たった。僕が小学五年生の時に友達から言われた、あの言葉と同じ、嫌な響きを感じたからだ。

小学五年生の時、僕は仲のよかった友達と大げんかした。理由はささいなことだったが、言い合いはとまらなくなり、とうとう互いに相手を罵倒するようになった。その時、最後に友達が僕にこう言ったのだ。